

<第 81 回 HSE セミナー 講演内容>

■テーマ：「18年介護保険制度の改定のゆくえ」

■講師：佐藤 優治 氏（株式会社ソラスト 専務取締役・全国介護事業者協議会 理事長）

前回の介護報酬改定から今日まで、介護業界が大きく変化を強いられていることに気がついているだろうか。「報酬」「人材」「飽和」といった業界の声が聞こえてくる。医療と介護の財源は同じ「社会保障費」である。消費税増税「延期」の影響が、今回の改定に大きく押し掛かって来る。2018年3月までに介護療養病床が廃止になる。高齢者の居住環境も変化してくる。抜本的な改革を行う今回の同時改定は高齢者のエンドオブライフまでも大きく見直しが必要になっている。そこをいち早く察知し、薬局と地域の関わりを介護を通じて考えていきたい。高齢者には医療も介護も欠かせない。

<講師紹介>

1957年北海道生まれ。80年千葉工業大学卒業。生活協同組合職員、81年株式会社日本医療事務センター入社。2000年取締役、05年福祉事業担当、07年常務取締役、12年株式会社ソラスト（旧日本医療事務センター）専務執行役員就任。2009～2012年 民間事業推進委員会委員、2010年「民間事業者の質を高める」全国介護事業者協議会副理事長、2010～2013年 福祉用具・介護ロボット実用化支援委員、2013年シルバーサービス振興会運営委員。同年、老健局 「介護サービス情報の公表制度の現状把握及び今後の利活用方策に関する検討会」委員

■テーマ：「地域包括ケアにおける“かかりつけ薬局”のあり方」

■講師：駒形 和哉 氏（株式会社Kae マネジメント 代表取締役）

気がつけば1年ぶりの登壇となる。16年度改定によって、「雨」が降った薬局、「晴れ」となった薬局に分かれた。調剤基本料の細分化により、「曇りのち晴れ」という大手調剤チェーンもある。果たして国の求める“かかりつけ薬局”とは、どういった薬局なのだろうか。今回の改定にそのヒントがあったように思う。「それは国の求めに応じる」ことではないだろうか。薬価が下がり、差益確保も難しいなかで、薬局が生き残るには「技術料アップ」と「処方せん」獲得である。その姿が「かかりつけ」に見えるのではないだろうか。「やらない」のか「やれない」のかをはっきりとさせたい。一緒に「やれる」方法は必ずある。生き残る薬局になるために。

<講師紹介>

昭和54年 東北薬科大学 衛生薬学科卒業後、医薬品卸に入社。営業担当、コンサルティング担当を経て、平成9年調剤事業と介護用品販売・レンタル事業の関連会社の設立・運営を社長として10年間任される。両事業を軌道に乗せ、平成19年に退任し、新たに医療・介護・薬局関連を主体としたコンサルタント会社を設立。現在、東京在住し全国各地で講演およびコンサルティング活動を展開する。多彩な経験と豊富な知識から語られる講義内容は実践的でわかりやすいと評判。全国の若手薬剤師の『兄貴分』として慕われている。日経DIなどに執筆。

■テーマ：「地域医療構想と地域包括ケアが薬局経営にもたらすもの」

■講師：川越 満 氏（木村情報技術株式会社 コンサナリストR事業部 事業部長）

「地域医療構想」と聞いてどれだけの方が理解をしているだろうか。いま病院のあり方が大きく変わろうとしている。今年に入ってから、大手を中心に、こぞって敷地内薬局づくりが進んでいるが、その未来はいかに。。。病院のベッドが減った分、その受け皿が地域に変わる。そこに「地域包括ケアシステム」がリンクして来る。新規開業が難しくなっている今日、薬局の継続への道は、「かかりつけ」による外来の確保と、在宅患者の確保である。当たり前のことだが、待っていてもお客がくる商売は存在しない。時代を理解せずに、生き残れる薬局もない。

<講師紹介>

1994年米国大学日本校を卒業後、ユート・ブレーンに入社。2016年4月からは、木村情報技術で出版及び研修コンサルティング事業に従事している。コンサルタントとジャーナリストの両面を兼ね備える「コンサナリストR」として、講演活動、書籍の出版プロデュースなどで活躍中。医療・医薬品業界のオピニオンリーダーとして、朝日新聞夕刊の『凄腕つとめにん』など数多くの取材を受けている。2015年夏からは才能心理学協会の認定講師も務めている。著書『病院のしくみ』『よくわかる医療業界』『医療費のしくみ』はいずれもベストセラー。2016年6月からProファーマCH(ケアネット)のコンテンツ「みつるんのわかるん♪とれるん♪調剤報酬」に出演中。